

『天人五衰』の小説構造可視化

——三島由紀夫『豊饒の海』の絵解き——

谷口 敏夫^{*1}

1 はじめに

三島由紀夫の長編『豊饒の海』は、『春の雪』『奔馬』『暁の寺』と続き、本論で扱う『天人五衰』はその四巻目となり、最終巻である。本論は、過去と同じくその作品構造をKT2システムを用いて可視化するものである。

2 実験・調査の目的と方法

過去の実験事例^{*2}に合わせて、本論の目的と方法に変化はない。要約すれば、長編小説の全体構造を登場人物、および読み解く鍵語によって可視化し、把握することである。このことから、小説の構造や流れが理解でき、作品のより深い鑑賞を可能とする。方法は、従前使ってきたKT2システム^{*3}での文章内位置付き用語抽出を基本にし、等高線グラフ^{*4}で文章地図をつくり、クラスター分析^{*5}を行った。

調査に使った『天人五衰』は新潮社文庫によった。実質総頁数299で、全30章構成である。四百字原稿用紙換算では579枚(299頁 x18行 x43字)。

^{*1} 京都光華女子大学 文学部全学共通教育センター教授：ttanigut@koka.ac.jp

^{*2} 谷口敏夫『春の雪』の小説構造可視化、京都光華女子大学研究紀要、39(2001/12)

<http://www.koka.ac.jp/taniguti96M/0/30/2001/Misima2001/Misima2001.html>

谷口敏夫『奔馬』の小説構造可視化、京都光華女子大学研究紀要、40(2002/12)

<http://www.koka.ac.jp/taniguti96M/0/30/2002/Misima2002/Misima2002.html>

谷口敏夫『暁の寺』の小説構造可視化、京都光華女子大学研究紀要、41(2003/12)

<http://www.koka.ac.jp/taniguti96M/0/30/2003/Misima2003/Misima2003.html>

^{*3} 谷口敏夫「KT2の世界」<http://www.koka.ac.jp/taniguti96M/0/20/KTCoder/KTCoder.html>

^{*4} マイクロソフト社のエクセルによる

^{*5} システムは「Let'sStat!Pro」。<http://member.nifty.ne.jp/QZM01222/LetsStat/IsIndex.html>

3 文章地図

表1に、KT2システムで作品から抽出した用語のうち、頻度数15以上のものを117例あげた。『春の雪』では頻度数20以上が105例、『奔馬』では137例、『暁の寺』では107例あった。過去三例に比べて頻度数を20から15に下げたのは、小説の長さ^{*6}が他に比べて短いので、頻度数を20にすると87事例と少なくなる。これを解消するために、事例の三件分を平均して116例を基本とした。この操作については、全四巻を総合的にみるとき再度適正な数値を出す予定である。

用例は人名（人物）が上位から数えて、{本多、透、慶子、百子、絹江、古沢、汀、聡子（門跡）、清顕、所長、ジン・ジャン、梨枝}と12名程度だが、初出は{透、百子、絹江、古沢、汀、所長}の六名と少ない。

特徴的な用語は{船、海、港、望遠鏡、波、水平線、信号所、レンズ}など、準主人公安永（後日養子となり本多姓）透の職業関係である。これについては、「海」が三島の重要な言葉と考えるのが先決であろう。安易に透の職業に引きずられたと思うのは倒立した考えである。海を描きたかったことが、透の職業選択になったとも言える。あるいは、望遠鏡やレンズが世界を認識する象徴という考えもあろう。

用語の傾向については後節にゆだねる。

^{*6}『豊饒の海』は文庫の頁概数では、春の雪（784枚）、奔馬（851枚）、暁の寺（712枚）、天人五衰（579枚）、総計で2926枚となり、400字原稿用紙で概略三千枚と言ってよい。

表1 用語の頻度

633	本多	68	時	34	思い出	24	認識	18	シャツ
542	透	65	世界	33	微笑	24	肉体	17	養子
298	僕	64	花	33	相手	24	感情	17	病気
291	自分	58	老人	32	手紙	23	ジン	17	青年
185	私	58	家	32	金	23	ジャン	17	黄
157	慶子	54	彼女	31	夏	22	人生	17	意識
127	百子	54	黒雲	30	老	22	階段	16	梨枝
127	あなた	52	言葉	30	他人	21	自由	16	彼方
122	船	50	赤	30	聡子	21	月修寺	16	幸福
120	女	49	部屋	30	火	21	汗	16	記憶
118	白	47	若	29	子供	21	椅子	16	意志
111	美	47	父	28	青	20	夕食	15	名
110	死	44	影	28	清顕	20	卑俗	15	信号所
98	絹江	44	天人	28	松	20	日本	15	女中
97	海	43	存在	28	醜	20	自意識	15	瞬間
93	少年	43	悪	28	時間	20	仕事	15	魂
86	顔	43	古沢	27	門跡	19	不安	15	見抜
85	人間	41	汀	27	視	19	水平線	15	勲
84	光	39	港	27	世間	19	五衰	15	巨大
80	彼	39	隠	27	自然	19	意味	15	安心
78	男	39	娘	26	波	19	ドア	15	レンズ
74	愛	38	望遠鏡	26	所長	18	不幸		
72	二人	35	美しさ	25	自尊心	18	退屈		
70	夢	35		24	緑	18	写真		

3. 1 用語の分類

表1から、全体の傾向をつかむために、116用例を10のクラスに分類しそれを表2とした。この分類は上位語を種子にし帰納的に行った。これは経験則に従うヒューリスティックスであり、過去の3巻で行った方法と同じである。ただし、今回は従来の「春の雪鍵語」「奔馬鍵語」「暁の寺鍵語」および「暁・快樂」「暁・象徴」を「豊饒海鍵語」としてまとめた。また本作品については「天人五衰鍵語」を上位として、「天人五衰・海」「天人五衰・原色」の二つの下位分類項目を設けた。

表2 『天人五衰』用語の分類 (頻度15以上の用語、116用例、6505頻度)

14件	人物	9件	豊饒の海 鍵語	21件	天人五衰 鍵語	10件	天人五衰・ 海	6件	天人五衰・ 原色
633	本多	70	夢	58	老人	122	船	118	白
542	透	43	存在	44	影	97	海	54	黒
157	慶子	28	松	43	天人	52	雲	49	赤
127	百子	24	認識	43	悪	39	港	28	青
98	絹江	24	肉体	39	隠	35	望遠鏡	24	緑
41	古沢	24	感情	32	金	31	夏	17	黄
39	汀	21	月修寺	30	老	26	波	290	←小計
30	聡子	16	記憶	30	他人	19	水平線		
28	清顕	16	意志	28	醜	15	信号所		
27	門跡	266	←小計	27	視	15	レンズ		
26	所長			25	自尊心	451	←小計		
23	シ・ジャン			22	人生				
16	梨枝			21	汗				
15	勲			21	自由				
1802	←小計			20	自意識				
				20	卑俗				
				20	仕事				
				19	五衰				
				17	養子				
				17	病気				
				15	見抜				
				591	←小計				
17件	三島鍵語	17件	抽象語	7件	一般語	10件	その他	5件	不要語
120	女	68	時	86	顔	298	僕	22	階段
111	美	65	世界	85	人間	291	自分	18	写真
110	死	58	家	47	若	185	私	15	巨大
93	少年	50	言葉	19	ドア	127	あなた	15	安心
84	光	47	部屋	17	意識	80	彼	15	名
78	男	32	手紙	16	彼方	72	二人	85	←小計
74	愛	28	時間	15	女中	54	彼女		
64	花	27	世間	285	←小計	44	父		
35	美しさ	27	自然			38	娘		
34	思い出	20	日本			33	相手		
33	微笑	19	意味			1222	←小計		
30	火	19	不安						
29	子供	18	不幸						
21	椅子	18	退屈						
20	夕食	16	幸福						
18	シャツ	15	瞬間						
17	青年	15	魂						
971	←小計	542	←小計						

なお表中の「自然：27件（抽象語）」はこれまで不要語としてきたが、ここでは入れた。この分類（抽象語）は、象徴ほどの高次ではないが、言葉の階層を一階上位の位置で用いている。「二人：72件（その他）」は男女の意味で残した。

○人物

「透」は前半では安永透だが、後半では養子になって「本多透」となる。これらは名寄せをしなければならない。

この巻には『豊饒の海』全巻を通しての主要人物 {清顕、勲、ジン・ジャン、綾子、本多} が登場している。例外として「慶子」は『暁の寺』を承けてこの巻でも、本多繁邦の変わらぬ友人として重きをなしているが、彼女はある段階で本多から遠ざかる。

「本多」が最多であることは、『暁の寺』と変わらず、主人公は本多繁邦であることが自明である。

○豊饒海鍵語

本来この豊饒海鍵語は全巻を見通してたてるべき用語であった。しかし、三巻『暁の寺』で小説構造に大きな変化があり、さらに『天人五衰』ではその変化が継承されず、巻末部分で全体に繋がるという構造を見せた。すなわち、この四巻目の中での「豊饒海鍵語」と、全巻の中での「豊饒海鍵語」とにひずみをもたらされた。

ここに挙げた9件の用例は第四巻『天人五衰』の中から局地的にみた全巻に通じる鍵語である。この件については分類視点の異同があるので、全巻を見通すまでの試験的な分類と考えている。

○天人五衰鍵語

この巻固有の鍵語として、老醜がある。老醜と引き替えに「金」「自尊心」「人生」などがある。この巻のテーマが「衰」にあると考えて間違いはない。

○天人五衰・海

「衰」をこの巻のテーマにしたにもかかわらず、「海」に関わる用例が特徴的にある。これは透の職業が双眼鏡をもって昼夜海を眺め、入出港の船を事前に

通報する「信号所」職員ということにある。しかし、作者三島が透の職業を「視る」「海」に関わる者としたことが「衰」のテーマを補強している。「視る」は本多の透観、認識、そして覗きに繋がり、最後は「透」の失明まで行く。海は『豊饒の海』全巻に関わる。しかも、それは現実の衛星「月」では、荒涼とした水のない海、渴きの海である。

○天人五衰・原色

本巻「衰」の中に原色が頻出する。これは、まだ分からない。

○その他

他の「三島鍵語」以降は、すでに三つの論文で述べたので割愛した。

●用語の傾向

表2を円グラフにしたのが図1である。これは高頻度用語116用例の頻度数による分類である。人物が29%に対し、『天人五衰』固有の鍵語は20%〔天人五衰鍵語、海、原色〕となる。これは『暁の寺』人物が37%、固有の鍵語が14%、『奔馬』人物35%、固有の鍵語11%にくらべて、やや人物が少なく、固有の鍵語が多い。第四巻の分量が他巻の六割程度である中で、人物といえは本多、透、慶子程度しか印象に残らない事実に対応している。

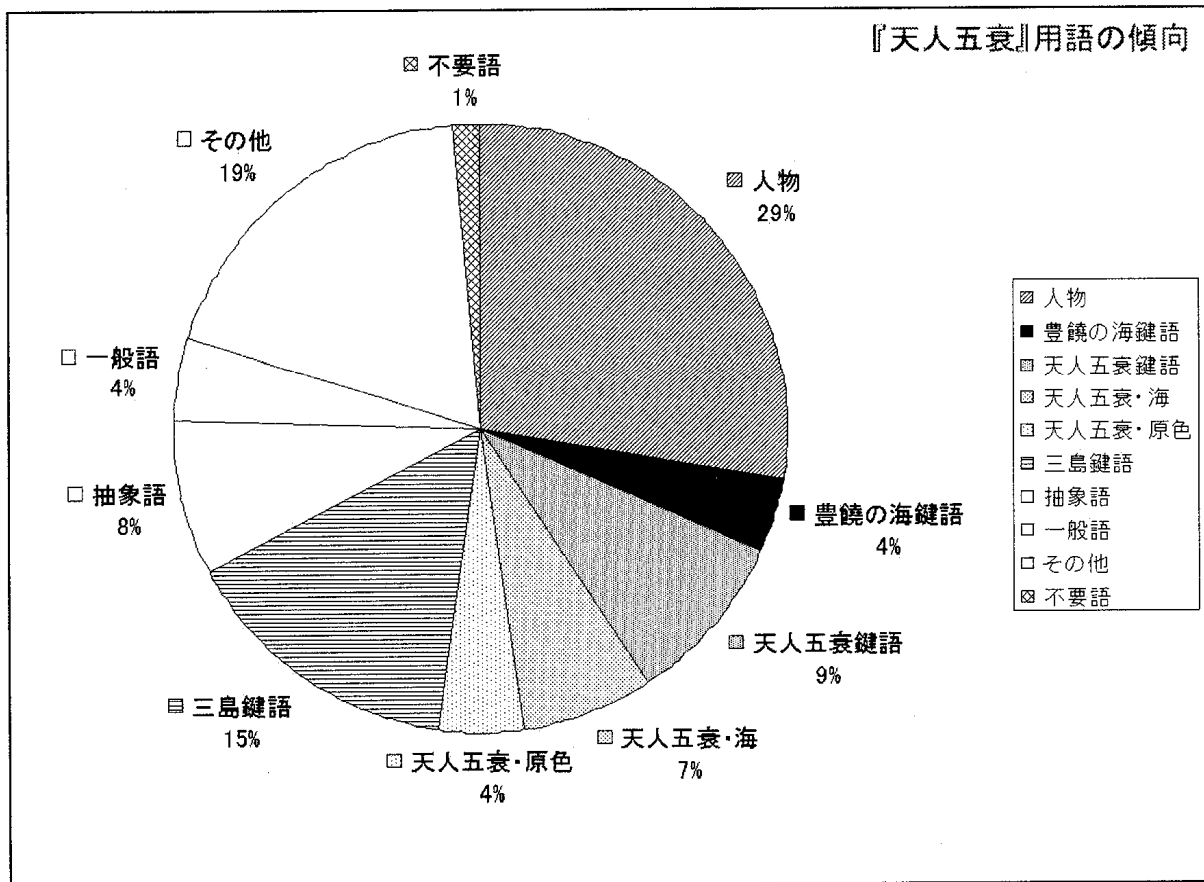


図1 『天人五衰』用語の傾向

◎用語の地図

図2では表2で分類された用語および用語群を地図化した。このうち◎でマークされているのは鍵語を一括して扱ったものである。

目を引くのは15章から22章まで、4種類の鍵語群 {豊饒海、天人五衰、海、原色} が激減していることである。これには二つの理由がある。

一つは、作品が一章あたり10頁平均にもかかわらず、この15章 (p125) ~ 22章末 (p168) までは一章あたり5.5頁平均となる。すなわちこの巻の8章分の文章量は平均の半分である。ちなみに、直前の14章は8頁半あり、直後の23章は7頁である。このことによって、母数の減少から鍵語群の絶対数も減ったといえる。

二つ目として、三島由紀夫の章立ては工夫の跡が大きいので、この分量を単に物理的字数としてだけみることはできない。章の短さは全体の構成に強く

関わっている。

この間の内容は、透が本多の養子になることが決定し、本多が教育方針を内心で決めていくこと。そして古沢という家庭教師を透につけ、古沢と透との駆け引きが描かれている。透の「悪」が予兆として描かれる場面である。そこに『豊饒の海』を貫く、清顕や勲の精神の峻烈さはない。それ故、常に鍵語が含む永遠に繋がる象徴性は減少したと判断できる。

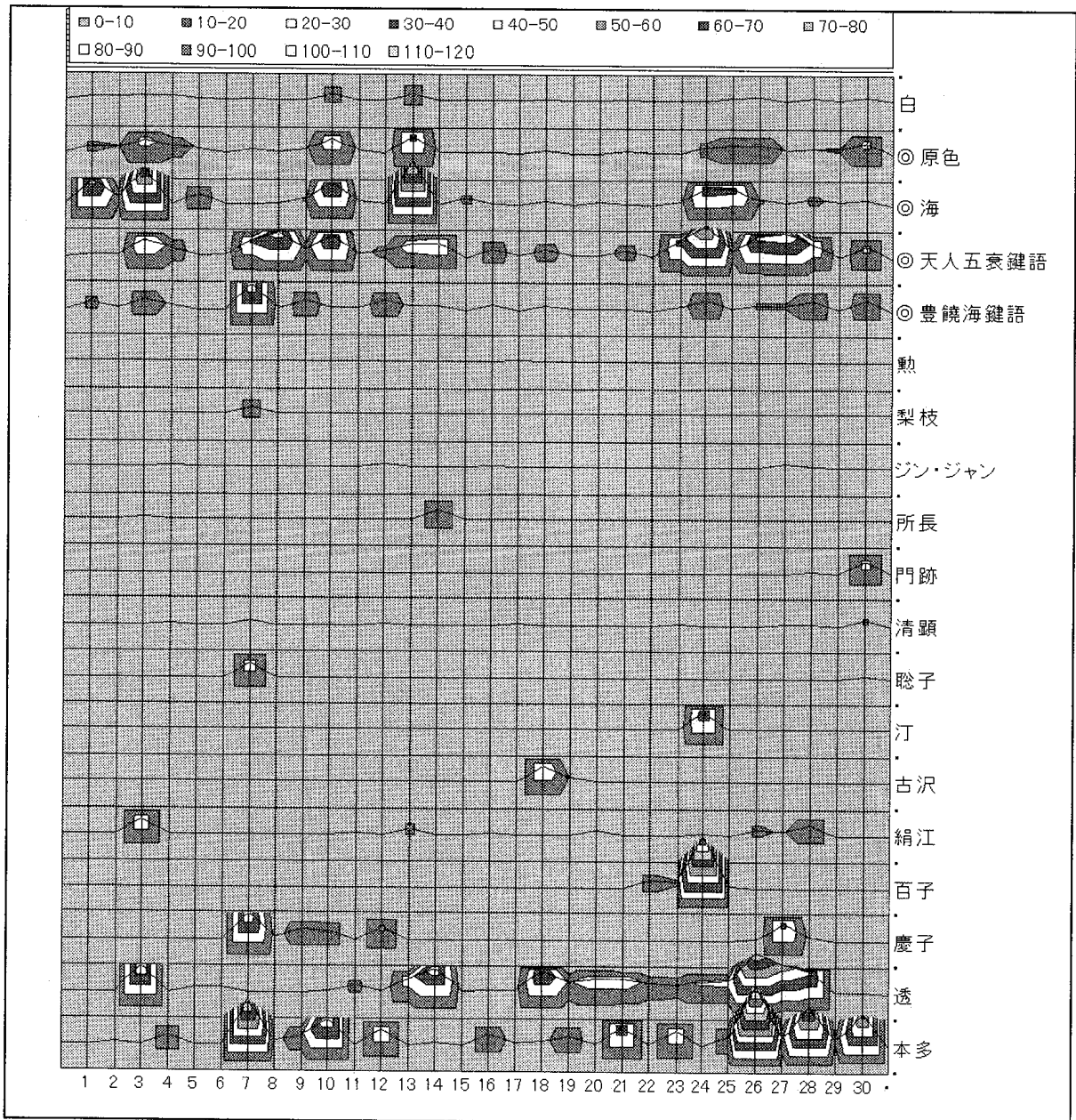


図2『天人五衰』分類用語地図

3. 2 人物の認定

上位頻出語のうち頻度数29%を占める人物について分析し人物を確定した。この結果は表3の名寄せ表にまとめた。これまでの研究に重複するが、人物の認定内容は便宜上『春の雪』『奔馬』『暁の寺』のものを流用し加筆訂正した。

表3 『天人五衰』名寄せ表

633	本多	157	慶子	39	汀	26	所長
5	本多繁邦	3	久松	1	汀宛	23	ジン・ジャン
638	本多小計	2	久松慶子	40	汀小計	3	月光姫
		1	慶子小母	30	聡子	26	ジン・ジャン小計
542	透	163	慶子小計	1	綾倉聡子		
3	安永透	127	百子	1	老来聡子	16	梨枝
2	安永	1	浜中百子	32	聡子小計	1	生前梨枝
2	本多透	128	百子小計	28	清顕	17	梨枝小計
2	透様			6	松枝清顕	15	勲
2	今透	98	絹江	3	清顕君	1	飯沼勲
1	又透	41	古沢	2	清顕の夢日記	1	飯沼
1	透独特	1	古沢君	39	清顕小計	17	勲小計
555	透小計	42	古沢小計	27	門跡	61	聡子+門跡
				2	御門跡		
				29	門跡小計		

以下▽印をつけた {百子、絹江、古沢、汀、所長} については、本論では「点描された人物」として扱う。一般文芸の世界として見るなら、三島独自の筆致、表現があるが、『豊饒の海』全巻の中では意義を見いだせなかったことによる。

○本多 繁邦 (ほんだ しげくに)

『春の雪』の主人公松枝清顕まつがえきよあきの友人であり、『奔馬』ではその主人公飯沼勲の弁護人となる。清顕の転生を観察する者として、全巻の主人公と考える良い。松枝清顕が三島由紀夫の雅や美に対する一つの見識の結果と考えるなら、飯沼勲は三島の武に対する結果となる。両者は現実世界でともに矯激であり、夭折する。そうして『暁の寺』では転生者と考えられるジン・ジャン（月光姫）の影は薄く、月光の透明度はやがて性的狂乱に落ちていく。そこでは第一部のイ

ンド、ベナレスでそれまでの世界観を崩壊させた本多が主人公になる。彼は、公園や別荘で人の情事を覗き見し、やがて透徹した認識者になる。しかしそれはまだ過程であり、本多の世界認識の完成は『天人五衰』を待たねばならない。

最終巻『天人五衰』での本多繁邦は、透徹した認識者であると同時に、生の理不尽、すなわち老醜にあえぐ男である。老醜は彼に公園での覗きを実行させ世間の知るところとなり、慶子との友誼も破綻した。また養子となった本多透は、繁邦を陰湿な方法で虐待し、繁邦に老醜と敗残者の思いを味わわせる。

すべてにおいて孤立した繁邦は癌の宣告を笑顔のもとに受ける。「幸い良性腫瘍しゅようの膀胱すいぞう囊腫うしゅのようですから、取ってしまえばからりとします」と言われても、繁邦は医者いしやの笑顔など信じる男ではなかった。入院手術を引き延ばし、奈良帯解「月修寺」への旅にでた。

○安永 透（やすなが とおる）本多養子となる

本来なら、第三巻『暁の寺』ジン・ジャンの転生者であるはずだった。本多は透の際だった世界観に自分と同質のものをみた。透は手を汚すことなく世界を見る若者だった。しかし慶子から批判され、養子となった理由を知り、「清顕の夢日記」を読み、「偽の転生者」を自覚した彼は、服毒し失明した。

○久松 慶子（ひさまつ けいこ）

『暁の寺』第二部で初出、その後この最終巻でも二つの役割を担う。一つは、本多の友人として、そしてジン・ジャンの記憶を本多と共に持つ者として、本多から清顕、勲を含めた壮大な転生の秘密を聞く。

二つは、この事実を透に突きつけ、透を自滅させる立場。慶子自身は、本多の覗き犯罪が世間に知られたことにより、彼との友誼を絶つ。

▽浜中 百子（はまなか ももこ）透の婚約者。

▽絹江（きぬえ）透を慕う気の触れた醜い女。

▽古沢（ふるさわ）透の家庭教師。

▽汀（なぎさ）透の年上の遊び相手女性。

○綾倉 聡子（あやくら さとこ）月修寺門跡。

○松枝 清顕（まつがえ きよあき）第一巻『春の雪』主人公。

- ▽所長 透の上司。養子縁組の仲介をする。
- ジン・ジャン（月光姫）第三卷『暁の寺』主人公
- 本多 梨枝（ほんだ りえ）本多繁邦の亡き妻。
- 飯沼 勲（いいぬま いさお）第二卷『奔馬』主人公

●登場人物地図

図3に人物のまとめとして、『天人五衰』人物地図を挙げた。これは図2とは異なり名寄せの正規化をほどこしたものであり、登場人物の通時的^{*7}、共時的パターンがわかりやすくでている。

通時的には、すなわち1章から30章までを通して、ほぼ登場するのは本多と透である。ただし、透は4章～10章の間で登場が激減する。その透の退場をまっけて慶子が7章から12章までを埋めている。しかし慶子は以後、27章で一度大きく登場する以外は小説空間から消える。

共時的には、綾倉聡子（すなわちこの巻での門跡）が最終章で、松枝清顕と本多とともに登場する。この章は、『豊饒の海』全巻の最終章でもあるので、このパターンは非常に重要である。すなわち『豊饒の海』全巻は、本多繁邦と綾倉聡子という二人によって締めくくられた。二人の媒介、絆が松枝清顕であったことを、このパターンは示している。

他の人物については、この巻初出の {百子、絹江、汀、所長} がいずれもある章でのみ描かれる、つまり点描に終わっているパターンが明らかである。百子は透の婚約者の立場でありながら、透の悪意の対象でしかない。気の触れた醜い絹江は美の世界を夢見る特徴あるキャラクターで、最後に透と結婚するのだが、全編に影を落とすほどの人物でもない。汀にいたっては、透が百子を傷つけるための傀儡の愛人でしかない。所長は、透を本多の養子にするために仲介する上司で、最初から大きな意味合いはない。

^{*7} 通時的パターンは、章を追った小説時間内で、用語が頻度によりどのようなパターンを表すのか。

共時的とは、ある時間（章）の断面で、どのような用語が共に頻度を持つのかというパターンを表す。

こうしてみると、この巻での初出の登場人物は、転生候補者としての安永透にだけわずかに意味がある。よって本巻は「人」に焦点をあてるのではなく、

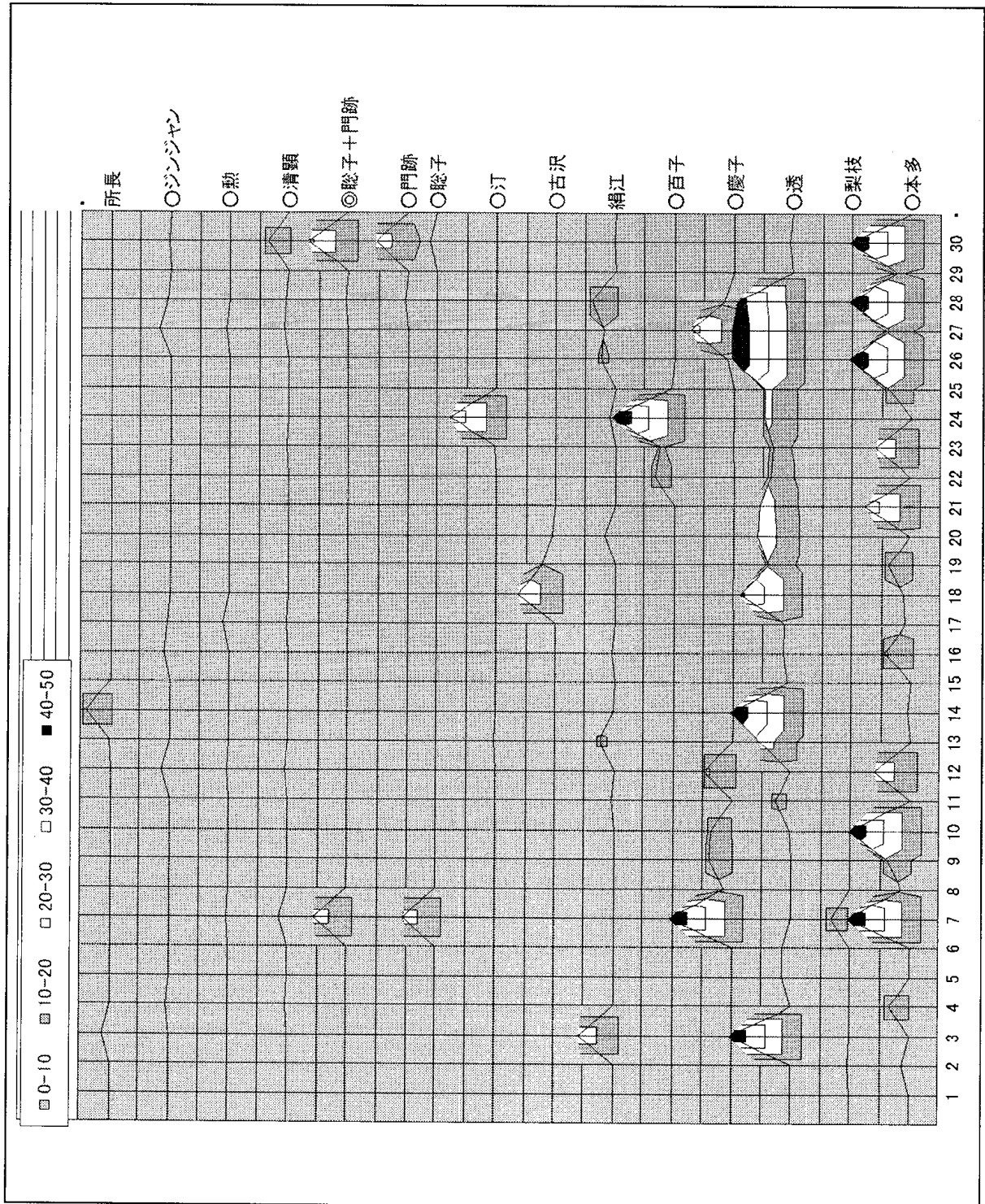


図3 『天人五衰』 人物地図 (名寄せ済み)

『豊饒の海』をどのように終了させるのか、そこに重きをおくのがよいだろう。

(1) 本多繁邦と安永（本多）透

図3で最も目につくのが最終章での透の影のなさである。透は完全に無視されている。透は『豊饒の海』全体にとっても無用の人物だった。これは読後感にもあり、透の心理描写をとおして彼がどれほど、悪、美、人生に対して特異な感性を持ち、優れた造形があっても、ついには無用の者であったという心証が残る。

事実、透は偽の転生者であった。転生者であるかどうかは、本人の責任ではない。『豊饒の海』全巻の中でそのように造形されたという事実が重要である。そのことで、読者に空漠とした徒労感をもたらし、それが最終章の本多の心象風景に見事に合致する。

このことは三巻『暁の寺』でも、ジン・ジャンの物語全体に対する寄与は高くない。第一巻『春の雪』松枝清顕と第二巻『奔馬』飯沼勲が持つ各巻最終章での重みに比較して、第三巻『暁の寺』ジン・ジャン、本巻の透はすでに世界からはじき出されていた。

すなわち、一卷と二巻は、それぞれの主人公 {清顕、勲} が最終章をしめくり、第三巻でジン・ジャンと本多の頻度が似通い、そしてこの最終巻では透はほとんど姿を見せず、ただ、本多と聡子門跡がすべてを締めくくる。それらが人物地図のパターンに明瞭に現れている。

(2) 本多と門跡（綾倉聡子）

聡子は、本巻前半では過去俗世の「綾倉聡子」として第7章で現れ、次に頻度が高まるのは最終章である。このとき、俗世の聡子としてではなく月修寺門跡として本多と語り合う。語り合うと言っても、門跡は本多を認知しないまま、本巻は終了する。

前半の第7章は頁数で23頁に達し平均の二倍である。この章は本多と慶子との古い（本多76歳、慶子67歳）のつきあいに終始する。しかしその中で、元氣なうちに奈良の月修寺を訪れなければならないという焦燥にかられ、本多の回想をとおして綾倉聡子が現れる。

共起する人物は {本多、亡き妻梨枝 (回想)、慶子、聡子 (回想)} の四名である。この前半部、すなわちまだ本多と透とは面識がないので (10章で出会う)、聡子への回想に「転生」という考えはほとんどない。

しかしゆめ月修寺を忘れたというのではなかった。無沙汰が重なるにつれて、心の中で月修寺がいよいよ尊貴な重味を増して、よほどのことがなくては聡子の住む寂靜じゃくじょうの境を犯してはならない、聡子に今さら古い思い出えにしの縁で近づいてはならない、という自戒が募り、年を経れば経るほどに、聡子の老いた姿を見るのが怖ろしくなったのである。(略) ~

一方、聡子を訪れれば、又しても本多は清頭の思い出を負うて、今もなお清頭の代理人として訪れねばならぬことも気が重いのだ。鎌倉のかえるさ、車中の聡子が、
「罪は清様と私と二人だけのものですわ」

と呟つぶやいた言葉は、五十六年後の今日も、なお耳朶しだにあきらかに響いている。会えば聡子も、そんな思い出の一トくさを今は恬淡てんたんに笑って語ったのち、本多とわけへだてなく語り合うようになるであろう。しかしそこへ行くまでが億劫で、自分が老いさらばえ、ますます醜く、ますます深く罪に染まってゆけばゆくほど、聡子に会うためには、いよいよ難儀な手続が課せられているような気がした。(第7章)

この7章では、本多は綾倉聡子をまだ俗世の目でしか見ていない。

「聡子の老いた姿を見るのが怖ろしくなった」本多は、いまだに聡子の美の廢址はいしにこだわっている。これは三島のこれまでの初期、中期の作品ではなんらかのモチーフになってきた。

「思い出の一トくさを今は恬淡てんたんに笑って語ったのち、本多とわけへだてなく語り合うようになるであろう。」これはごく普通の人の想いだろうし、この『豊饒の海』がそのように終わったとしても、物語としてのリアリティに傷はつかぬだろう。しかし、清頭と勲の死に輪廻転生を見つめてしまった本多が、いまさら透の悪や美に気持を動かし、かつまた老醜という現実の中に聡子との茶飲み話の憩いを想像し見いだすのは、違和感ぬきでは鑑賞できない。

では第30章、すなわち本巻の最終であり、『豊饒の海』全巻での最終章に聡

子門跡はどのように現れるのか。

パターンとしては、{本多繁邦、綾倉聡子（門跡）、松枝清顕}の3名しか現れないことに気がつく。この頻度は {63、32、18} であり、本来なら本巻の主役であっても良いはずの転生候補本多（安永）透はすでに偽物となり、わずかに頻度3しか現れてはいない。

本多の問いかけに門跡は穏やかに答える。

「その松枝清顕さんという方は、どういうお人でした？」

ようやく門跡が、本多の口から清顕について語らせようとしているのだろうと察した本多は、失礼に^{わた}互らぬように気遣いながら、多言を^せ贅して、清顕と自分との間柄やら、清顕の恋やら、その悲しい結末やらについて、一日もゆるがせにせぬ記憶のままに物語った。

門跡は本多の長話のあいだ、微笑を絶やさずに端座したまま、何度か「ほう」「ほう」と合槌^{あいつち}を打った。途中で一老が運んできた冷たい飲物を、品よく口もとへ運ぶ^ま間も、本多の話^まを聴き洩らさずにいるのがわかる。

聴き終った門跡は、何一つ感慨のない平淡な口調でこう言った。

「えろう面白いお話やすけど、松枝さん^{まつがえ}という方は、存じませんな。その松枝さんのお相手のお方さんは、何やらお人違いでっしゃろ」（第30章）

すなわち第7章で回想の中に描いた綾倉聡子は、最終章では、本多の長きにわたる人生そのものを抹消する者として眼前に座す。門跡は、対座する本多繁邦はおろか、そも発端となった松枝清顕すら記憶にないと答えた。

(3) 空白共起

この一連の研究では、人が共時共起しない章を空白共起として本文に意味を探ってきた。

空白共起が何故あるのかについて一番明確なことは、頻度数を百分率では扱わず絶対頻度でみていることによる。そのことで文章量の少ない章からは当然空白共起が起きやすい。しかし、ここに作者の意図があると考えれば、空白共起の意義は深くなる。すなわち、なぜ作者は当該章を短くしたのか、という設問にシフトすることになる。

図3により人物の空白共起のおこる章を挙げると、1章、5章～6章、15章の三カ所となる。厳密にはゼロとは言えないが、図3に変化を見せない章はその対象とした。

1章は、冒頭から次々と海の様子、雲の流れ、船の動きが描かれ、章末になって「安永透は倍率三十倍の望遠鏡から目を離した。」となる。この章の頁数は5頁分であり、章平均頁数の半分となる。人物の共起がないのは、人間を寄せ付けない「海」を人間が見ているということである。

5章～6章は二つをあわせて5頁あり、章平均頁数（10頁）の四半分である。ここは、透の海を見つめる仕事内容と、夜勤あけの下宿での朝風呂の情景である。透は脇腹の「三つの黒子」を見つめる。次の7章から慶子が登場し本多との日常が描かれ、そして後章にむけて安永透を養子にする話に続いていく出発点である。よって、この5章～6章の空白共起は助走前の一刻と考えて良い。

15章は、前章で所長から本多家養子を頼まれた透がそれに答えた後の空白の章で、わずかに1頁の分量である。しかし象徴性は高い。

その夕景の空は美しかった。沖の幾条の横雲の彼方に、積乱雲が神のように佇んでいたのである。

～（略）～

白い埴輪の兵士の群のように居並んだ雲の中には、上方が黒く逆巻いて、竜巻なりに天へつながっているものもある。崩れかかった形が、薔薇いろの光りに染っているものもある。そのうちに横雲の色が、一つ一つ淡い紅や黄や紫に分れて、これに従って、積乱雲の色が健やかさを失った。透が気づいたとき、先刻あれほど白く輝やっていた神の顔は、灰色の死相になった。

このように見ると本巻での空白共起は、頁数の少なさによってもたらされてはいるが、内容的にみて、いずれも透の転機部分に現れている。なにかが透に始まる前に、短い内容で透の姿を描写している。それにはいずれも、透の信号所職員という、海と雲と船とを見つめる情景が織り込まれている。

自然の中に船という人為を見つめる。そして、転機が訪れる。このようなパ

ターンを空白共起の存在が示している。

4 クラスタ分析

クラスタ分析の適用はすでに『春の雪』『奔馬』『暁の寺』で述べた。ここでは『天人五衰』について同じ分析を試みた。以下分析の対象とした人物及び鍵語は、それぞれ「3.1用語の分類」、「3.2人物の認定」で得たものを、勘案し選定した。

人物としては名寄せした表3から {本多、透、慶子、絹江、古沢、汀、聡子門跡、清顕、百子} の九名を選んだ。鍵語としては表2から {豊饒海鍵語、天人五衰鍵語、海、原色} の4鍵語群を選んだ。

4.1 人物と鍵語のクラスタ分析

図4は、主要登場人物と鍵語の関係をクラスタ分析し樹図（デンドログラム）を描いたものである。手法はユークリッド距離およびウオード法によった。『暁の寺』での論究と同じく鍵語を群としてあつかい、個々の要素への重み付けは行わなかった。以下、図4を解釈してみる。

「○本多」クラスタ

図4では、○本多 {本多、透、天人五衰鍵語、海} クラスタが現れている。「○本多」が右よりの位置で他の三つと収斂しているのは、前半部で透の世界が描かれ、本多はそこに直接関与せず、むしろその空隙を慶子がうめたことによる。透のもとに天人五衰鍵語と海とが集まったのは、透の海と船とを相手にする職業と、そして、美醜に関する透の言及が大きかったと想定している。

「○慶子」クラスタ

「○慶子」が、豊饒の海全体に関わる鍵語とクラスタを形成したのは意外でもあったが、本多の心に秘めた清顕、勲、ジン・ジャンの転生の軌跡を知った慶子が、『豊饒の海』全巻に関係を持つのは自然であると納得できた。

「○門跡」クラスタ

聡子門跡と清顕がクラスタを形成するのは、最終章における15頁分の中で

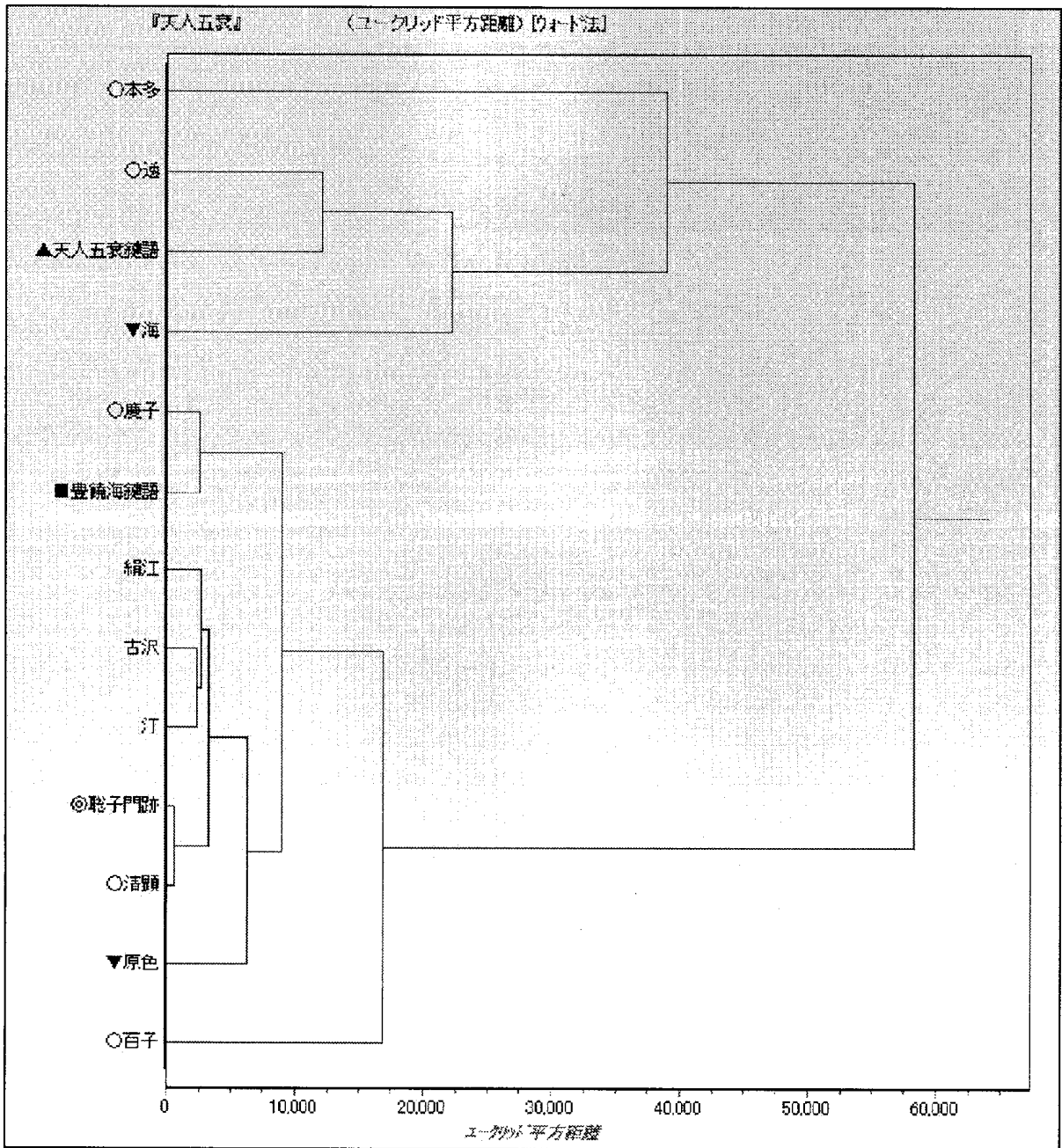


図4 登場人物と鍵語群*8

ある。このクラスターが同時に {絹江、古沢、汀} という点描的人物と近似するのは、「○門跡」も表層上は点描に過ぎないからである。

しかし三島由紀夫は、何人かの人物を等しく点描しながらも、門跡と清顕と

*8 ○は名寄せ人物、▼は『天人五衰』固有の鍵語群、■は『豊饒の海』の四巻分から選んだ鍵語群

を最終章に集中することで、この『豊饒の海』全巻を閉じたと言える。

以上ここでは3つのクラスターを認め、次節に続ける。

4. 2 『天人五衰』概念地図

これまでの記述で『天人五衰』から登場人物、鍵語を選定し個別に解釈を加えた。ここではクラスター分析の結果を概念地図に応用した。すなわち用語のY軸配置をクラスター間の類縁によって正規化した。この結果を図5に載せた。

●地図の解釈

まず全体としてしてみると、終始一貫して登場するのは本多だけである。本来なら転生の主人公である安永透がもう少し登場すればよいのだが、透は半分にあたる15章分しか出てこない。これは安永透が偽の転生者であったことによ

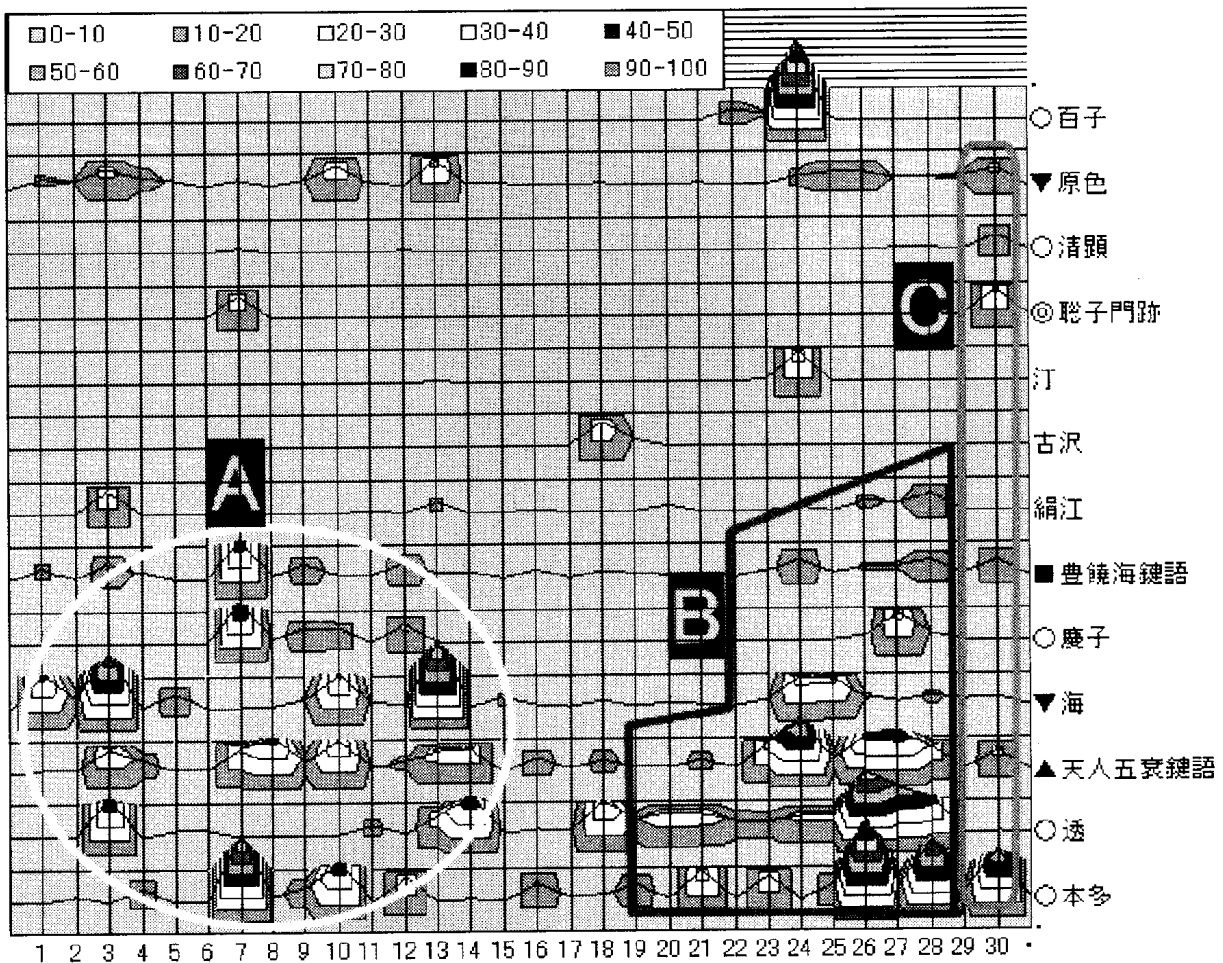


図5 『天人五衰』概念地図（人物と鍵語）

るだろう。本多（それは、作者三島とも考え得る）にとっては、透を最終章まで引っ張る必然性はなかったと考えて良い。

次に、16章～18章の中盤を境にして、前後に二つの明確なパターンAとBとが見られる。また最終章はパターンCに示したように、全巻の結末としての特色がでている。

以下に地図に見える特徴的なパターンを解説する。

・Aパターン

このAは前半に現れたパターンである。人物は {本多、透、慶子} の三名で成り立っている。しかし慶子が頻出する7章～12章に透は殆ど出てこない。またこの間、本多と慶子とは対になって登場するが、透は人物として孤立する。

この前半に現れるAパターンは、本来なら転生者として全巻に生きるべき透が、点描された人物にすぎないことを示している。特に第7章に見られる、{本多、天人五衰鍵語、慶子、豊饒海鍵語、聡子門跡} の強い共起は、透を抜いたものである。このような強い共起を含むこの前半部Aパターンは、『豊饒の海』全巻のための「想起パターン」と結論づける。よってこのAは『天人五衰』のためだけに生まれたものではない。このことは、『暁の寺』での一部（インド）と二部（日本）との差異と同じだとも言える。その第一部は全巻に通じていた。

・Bパターン

透はこの後半に出現したBパターン、特に25章から28章でピークを迎える。本多も共起するが、最終30章では本多だけが残る。そして、透は慶子の鋭い批判と、清顕の夢日記を読み「偽の転生者」を自覚したとき、毒をあおり失明し、絹江という醜い女の世話を受け、最終章では消える。

天人五衰鍵語がこのBで頻出するのは、本多の老醜が描かれていることによる。天人五衰のテーマは人生の老いでもあった。「老い」は26章で本多の覗きが世間に公表された後、本多を襲う。慶子は27章で本多との友誼に別れをみせるために現れた。覗きが世間に知られた本多老人は、透からみてすでに禁治産者扱いであった。そして手のひらを返したような透の暴力を前にし、本多は清顕の夢日記を透に見せる。透は二十になって死ななかった、すなわち偽の転生

者だったのである。

このBパターンには、老いの中で本多が人生をみつめ、透が「偽の転生者」と知って破綻するまでの、そのクライマックスが現れている。

・Cパターン

このCパターンを描くために三島由紀夫は全四巻を書き継いできたのだろうという、感慨におそわれる。

おびただしい原色につつまれた最終章は、しかし空漠としたものだった。

ここには、人として、本多と門跡、そして回想の清顕だけが現れる。よく知られた事実だが、末尾は以下になっている。

「それなら、勲もいなかったことになる。ジン・ジャンもいなかったことになる。……その上、ひょっとしたら、この私ですらも……」

門跡の目ははじめてやや強く本多を見据えた。

「それも心こころ々ごころですさかい」

～ (略) ～

これと云って奇巧のない、閑雅な、明るくひらいた御庭である。数珠を繰るような蟬の音がここを領している。

そのほかには何一つ音とてなく、寂じやく寞まくを極めている。この庭には何もない。記憶もなければ何もないところへ、自分は来てしまったと本多は思った。

庭は夏の日ざかりの日を浴びてしんとしている。……

「豊饒の海」完。

昭和四十五年十一月二十五日

三島由紀夫はこの最終稿を新潮社に預け、市ヶ谷へ旅立った。

このCパターンを見ていると、原色にあふれ、本多と門跡だけがいる月修寺に「色即是空」という言葉を当てはめたく思う。

記憶もなければ何もないところへ、本多とともに来た読者は、しかし記憶の深層に春の雪の白、奔馬の血と黒、熱帯ジャングルの濃緑、そして天人五衰の青と白、と色彩にあふれた過去を持つ。一卷、二巻、三巻があつて、そしてこ

の四巻では冗長なまでの若い透の天才の奢り、悪や美への傾斜、本多の老醜、それらがあって、やっと「記憶のない」庭にきた。

「庭は夏の日ざかりの日を浴びてしんとしている。……」

Cパターンからこの日ざかりの庭を想像することはできない。しかし、この結句を読むとき、Cパターンに現れた色と、そして本多、門跡、清顕の意味を知った。三島は、第四巻の九割を捨てて、この結末を生かした。それは、『豊饒の海』という質量ともに源氏物語に匹敵する世界を、「しんとしている」という言葉で締めくくったことに表われていた。

ま と め

『天人五衰』の小説構造を、登場人物と鍵語によって分析した。

登場人物は、正規化をほどこした時点で、{本多、透、慶子、絹江、古沢、汀、聡子門跡、清顕、百子}の九名を対象とした。しかし、本論は、絹江、古沢、汀、百子の四名を「点描された人物」として処置し、分析は行わなかった。鍵語としては、{豊饒海鍵語、天人五衰鍵語、海、原色}の4鍵語群を選んだ。

これら人物と鍵語とをクラスター分析、及び地図化によって可視化し、『天人五衰』小説構造について、本論4章でいくつかの結論を得た。

これまでの論考とは異なり、人物と鍵語の多くに分析を費やさなかったのは、この巻の重みが第30章にある事実から、それまでの29章は一般文芸の分析に等しいと判断したからである。『豊饒の海』の中で本巻を見るなら、本巻は本多繁邦の老醜を味わい、最終章の、老醜や美や人生を超えた「しんとした庭」にたどり着くための必然の道と考えた。

転生は破綻し記憶のないところへたどり着いた。しかし、破綻したことがこの物語世界をより実り多い作品にしたと味わった。この最終章の茫漠とした「空」の庭には、清顕と勲の重さが基底にある。この重さが『豊饒の海』の持つ絶対的な重さであろう。そこが、一般文芸とこの作品とが異なるところである。

安永透は、悪や美の天才でありながら、失明し醜い絹江と結婚した。それは

日常であろう。日常を超えた世界を、作者は描いたに違いない。

本論は、Cパターンの抽出で分析は完了したとする。

平成十六年九月二十五日 谷口敏夫 識